

答志島調査報告

答志島における労働環境について

福嶋聡子・Ducci Gloria

今回調査を行った三重県鳥羽市答志島は、鳥羽港の北東約2.5 kmに位置し、鳥羽市最大の島である。答志・和具地区と桃取地区の3つの集落がある。伊勢湾に面している答志・和具地区では主に水産業が盛んで、大きな黒字を出す地域でもある。イセエビ、タイ、アワビ、サザエ、タコ、カタクチイワシ、シラス、サバ、あなご、のり、もずくなど、四季を通して様々な魚介類をとることができる。また、海女が活躍していることでも有名である。

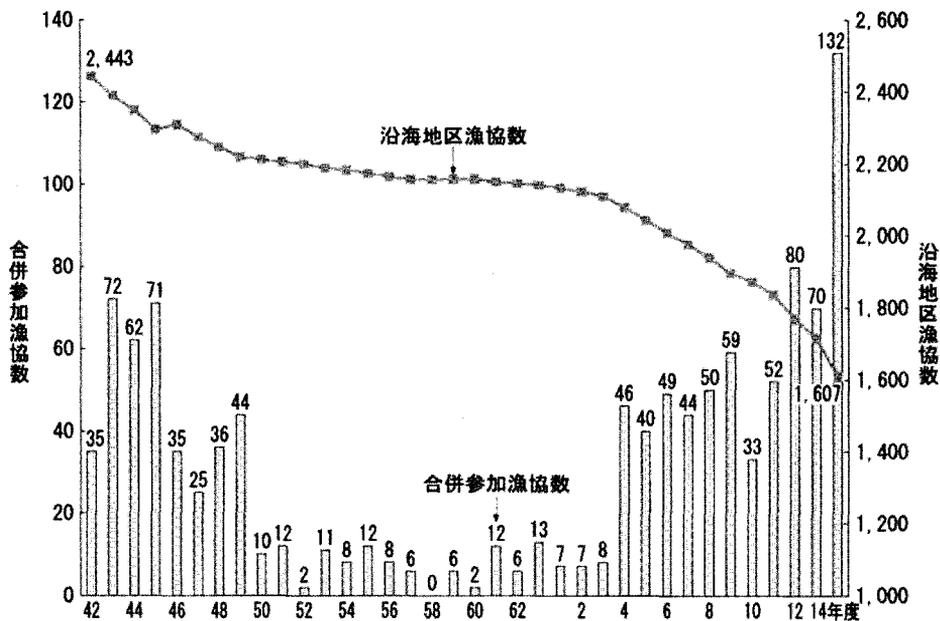
本稿では、答志島における漁業従事者の労働環境の変化について、人々がどのように捉えているのか、を検討する。福嶋が答志地区における漁業協同組合について、グロリアが海女の労働事情について、二つの側面から調査を行った。

1 答志地区における漁業協同組合について ～合併を巡って～

1.1 はじめに

漁業協同組合は、協同して組合員の漁業経営と生活を守り、よりよい地域社会を築くこと、そして組合員の経済的、社会的地位を高めることを目的としている。しかし、全国的な傾向として漁業協同組合の事業は、漁業従事者の減少、漁業生産量の減少、産地魚価の伸び悩みなど漁場環境の悪化によって、縮小傾向にあり、漁協の経営は悪化しているようだ。こうした背景から、漁協の体質強化のために合併が急速に進んでいる。図1から分かるように、平成15年度は、124漁協が合併に

図1 沿海地区漁協数と合併参加漁協数の推移



資料：水産庁
出所：平成15年度 水産の動向に関する年次報告

参加し32の合併漁協が誕生している。

三重県下でも県内の漁協を7つの自立漁協に再編するよう漁協合併に積極的に取り組んでいる。平成14年10月には鳥羽市及び磯部町内の全22漁協が参加し、鳥羽磯部漁業協同組合が設立された。今回調査を行った答志島の三漁協もこの合併に参加している。

三漁協の中でも答志地区は恵まれた漁場を持ち、若い漁師の多い地域でもある。答志漁業協同組合は、合併せずとも自営は可能だったようである。ではなぜ、合併に踏み切ったのだろうか。合併を巡る答志島漁業協同組合の取り組みを考察した。

1.2 漁協合併の目的とその変化

答志支所運営委員長である浜口一利さん、副委員長永富久兵衛さんに、合併した理由を伺った。最大の理由として、漁業従事者の減少がある。答志地区は比較的若い漁師が多い。しかし、10年、15年後の答志島の将来を考えると、合併せざるを得ないと判断したようだ。では、漁業からリタイアした人々はこの問題についてどのように考えておられるだろうか。17代目組合長であった浜口由男さんは「時代に合わせていかなければならない。」と述べられた。今後の答志地区における漁業のあり方を現役の漁師もリタイアした人々も模索しているようだ。

また合併の利点について伺ったところ、組合費を増やす面では合併以前よりも、合併後の方が良いそうである。デメリットは、配当金の減少と本所をトップとする管理型の体系によって、何を行うにしろ本所の許可が必要になり複雑な事務業務が増加しことであるようだ。

合併を行って2年しか経過しておらず、まだ試験運転時期だそうである。合併の真の結果が出てくるのは、10年以後になるであろうということだ。

1.3 終わりに

合併によって、漁協組織としての名は変化しているが、「答志の生活の全て」を担う「小さな政府」としての役割は以前と変わらぬままであるようだ。合併について、漁協に関わる人々のお話を伺っていると、現役の漁業関係者だけではなく、漁業からリタイアされた方々も、将来における漁協のあり方、そして答志の将来について考えてお

られる。こうしてみると漁業協同組合という組織は、経済的な相互扶助だけではなく、地域的な團結はむしろ合併後によって強まっているように私は感じている。(福岡)

謝辞

調査に際し詳しい説明をしてくださった鳥羽磯部漁業協同組合答志支所の方々、そして答志島のみなさんに厚く御礼申し上げます。

参考文献

農林水産庁『平成15年度 水産の動向に関する年次報告』
(http://www.hakusyo.maff.go.jp/books_b/WG01H150/html/index.htm)

益田庄三『漁業協同組合と生活空間』1979, 白川書院

2 答志島海女労働事情について

2.1 はじめに

答志島で調査をしながら、イタリア人である私は海女が海の神様のような伝説的な存在としかとらえていなかったことに気が付いた。聞き取り調査や海女の仕事の観察を行ってから、労働としてみた海女の仕事に興味を持ち始めた。

外国にも知られている徳川時代の絵師歌麿の絵、三島由紀夫の「潮騒」、フォスコ・マライーニの「海女の島」等に出て来るような詩情に富んだ海女のイメージが印象に残っていた。

そういうイメージとは異なる答志島の海女にはより大きな魅力があった。数字から出て来る海女の高齢化は確かであるが、高齢の海女の殆どが若者に負けない意気を持っていることが私にとっては魅力であった。特に今後の海女事情はどの方向に進むかという点に関心を持った。

2.2 三重県、志摩の海女労働事情

志摩の地域では海女が活躍していたのは、更に古く、つまりこの地方に住居を定めた頃からであったと思われる。

志摩では海女はアマドとカジキと呼び、水中に潜ることを潜くという。

海女は磯場と潜水の仕方によって徒人と舟人に分けられる。

徒人の磯場は浅くて、舟がなしで岸から泳いで、

自力で4.5 mから6 m潜水する。

1965年の調べによると志摩地方の徒人は2300～2400人いた。舟人は深い海底を漁場とする。海に沈むため、ハイカラと呼ぶ重さ14 kgぐらいの鋳物の錘を、長い網に結んで使う。約20 m、もっと深く潜る者もある。海底に着くと錘を手離して獲物を探す。海女は命網と呼ぶ細網を腰のまわりにしばりつける。舟人は男性とペアを組み小船で沖に出て漁をするのはもっとも盛んである。一気に深くまで潜水して、浮上する時は船上で待機する男性（トマエという）に合図して引き上げてもらうのである。信用を期待するトマエを勤めるのは夫、親などが圧倒的に多い。1965年の調べによると志摩地方のフナドは720～750人いた。

4年に一度は三重県の「海女操業実態調査」が行なわれる。1996年のデータによると志摩全体で徒人と舟人を合わせた海女数は2100人を超える。このうち男性は2割強、志摩の海女は圧倒的に女性である。海女に限っていえば60代以上の者が過半数をしめる。

海女の作業は、季節と採取物によって回数は定まらぬが、普通は午前にも一回、午後にも一回または二回で、一回の作業時間は一時間半で、一時間に約40度を潜水するが、夏期の鮑取りは時間が長く、冬季のサザエ、海鼠の採取は時間も短い夏季の荒分布、かぢめ採り早期から始めて午前中に2回、午後の作業を「手返し」と言って一回である。海女の潜水時間は40～50秒ぐらいで、獲物は鮑、海鼠、サザエ、若布、天草、トコブシ、ウニ、などであるが、鮑がメインである。

2.3 調査などによる答志島の特徴

桃取においては、海女漁は全くと言ってよいほどなされていないので、本書では答志と和具に考察を限る。

1922年に志摩半島で海女労働事情について名古屋職業地方職業紹介事務局に行なわれた調べによると海女数は和具では（徒人：500、舟人：70）570、答志：では（徒人：483、舟人：65）548であった。

平成12年に答志における海女・海士の従事者数はとしては約150人弱が数えられた。2004年の和具の夏磯従事者数は167人であり、その中では100人ぐらい女性であり、約3分の1は60歳以降である。

2003年7月に五日間の聞き取り調査を行なった際、次の点に仕事形態の特徴と変更傾向がみられた。

①口開け制度

答志・和具では、7月1日より盆頃まで海女漁がなされている時期に答志を滞在した。もう一つの潜水季節は海鼠を探る冬期である。

口開け（解禁）の日程、作業日数など漁場の状況で地区それぞれに厳しい決まりがある。例えば波切乱獲を防止する工夫として、波切の長期間の約15日に限定した期間は潜水が解禁されている。つまり鮑、サザエを始め海藻、若布、荒布、天草、ふうのりなどに至るまでそれぞれの規定日以外には採取を禁じられている。

海女の潜水季節は三重県漁業取締規則並びに漁業組合の申合わせにより制限を受けているが、各村漁業組合等の大体において4月から10月末までということができる。したがって、海女はこの二重の制限を受けているので、地域により作業の季節が違っている。

答志漁協組合は21業者があって、19番は海女業者である。その役割は冬や夏の採集期間を決めたり、組合員の意見を受け取ったりすることなどである。組合員だけが漁業権を持っているので、海女全員が組合員として登録しなければならない。漁協組合が採集期間、出航してはいけない時、こづきみ（八幡神社の大祭）についてはマイクで告知している。天気などで、出航できない場合は朝の6時にアナウンスして、採集期間は一日延長する。不幸なことがある場合、その日は海女の活動が一時停止されている。

2004年に和具漁協組合が採取期間は7月13日から、8月11日まで、1日の回数は2回で、それぞれ1時間半としていて、次のように定められている。

「海女は7月1日から盆まで活動できる。操業期間はタカの磯7日間、沖の磯5日間で1日ふたづけ操業する。盆まで1日残った時は操業しない。2日以上残った時は運営案員、海女の責任者で協議して決める。沖の磯は操業時間中潮時を見て操業する。アラメは海女操業の期間中採取することができる。（旗持ちはトナド全員に持ってもらう。）海女期間中水上げのない者は操業を停止させる。組合員以外は操業できない。

ヒトデ採取は1日でも操業した者全員参加で共

同採取する(組別にヒジキ取りの場所を操業する)やむを得ず欠席する者は組合へ申し出る。其の内容により罰金を徴収するか翌年初日1日目を口止めする。」

② 専業海女の減少

答志と和具においては海女をする者は漁業のみに限らず自営業、無職など広い範囲に渡っている。

昔は農業に従事し、又各種の副業に従事し、漁業の手伝いをし、又農業の手伝いとして出稼ぎに行く海女が珍しくはなかった。答志村では海女を家庭の本業としており、漁期外(余暇)には多少の耕作をなすに止まった。

聞き取りの結果、現在は、旅館、漁業の手伝いに携わっていた海女が多く、一年中潜る海女が圧倒的に減少している。取材した専業海女のAさん(73歳)は船のオーナーも含む10人組で鳥羽の漁業権を買って、一年中出航すると語ったが、海女が採集期間ではない時期は、主に漁協や旅館の手伝いや、主婦をしている者が殆どである。

出稼ぎの状況を見てみると1922年のデータによれば答志村の出稼ぎ季節は春から夏にかけてであり、熊野地方に出稼ぎするものが80名であり、和具村では春から夏にかけて紀州方面、熊野沿岸、静岡地方に天草、鮑の採捕に多数出かけていた。また博覧会の見世物として大阪へ行ったのである。

現在は出稼ぎをする海女も珍しくなってきた。

③ 高齢化

答志島では年々、高齢者の比率は高くなっている。離島をする若者が多く、海女の仕事に携わる若者が殆どいない。

取材した海女は50代以降、大部分は60・70代であった。男性も潜るようになった現在では海士の年齢は海女より比較的高い。

昔は志摩では潜水の出来ない女は一人前と認められなかったし、又嫁入の資格もなかったようだ。熟練した潜水技術こそ海女達が誇り得る嫁入道具であるという伝統的な考えかたがどんどんなくなって行く。昔の海女は海に親しみ、母、姉の泳ぎぶり、潜水ぶりを真似て自然に潜水技術に熟練していた。正式に潜水を習得するのは12~13才から20才ごろまでの間であった。一方で、今の若い世代は海との親密な関係を無くしてしまうことが多いようである。幼い頃から海よりプールを優先して、高校生時代は島を出るようになる。ところで、嫁として島に移ってきた30代、40代の女

性は、初めて海女の仕事を習得したという例もあった。

④ 海士の増加

海女の字から潜水は女漁師に限ると考えさせる。確かに、女は脂肪が多く、呼吸も長くて生理的に男より潜水に適しているといわれている。そして、漁場が狭くて、獲物も少ないため、男の労力では忽ち獲物がなくなってしまうので、いつからか女の仕事となっていった。

それにも関わらず、最近、男海女(海士)が増加した。その要因の一つとしてはウェットスーツの導入が考えられる。明治44年頃までは腰巻一枚にて上半身は裸体だったが、45年頃より襯衣に腰巻となり、ウェットスーツを着るようになったのは10年以上になる。ウェットスーツの導入によって長く潜れるようになったので、潜る時間を制限されている。答志、和具において潜水時間は午前中と午後それぞれ1時間半と定めている。

鮑の数が減少しているが、比較的若い海士は海女より眼がよく見えることや、力の差もあって、海士の方が大きな鮑を取ることが出来るようだ。

2.4 海女の減少

40年前は答志島は「あわびだらけ」であったといわれている。しかし現在は、漁協組合、鳥羽市役所、海女白身の方々等に鮑の漁獲量は減少し、それに伴い海女漁業就業者も減少の一途をたどり、後継者もほとんどいなくなる現象が語られた。

1920年に志摩半島で行なわれた調査によれば、当時でも答志島での海女減少がみられたようだ。当時は、都市に出て働きたい人の増加、潜水機やその他の海底作業機械の発達、漁獲物の減少の三つの理由があげられている。

現在は、漁獲物の減少は環境悪化、資源乱獲等に関連があると考えられる。特に名古屋空港などの建設に伴う潮の流れの変化によって、鮑の栄養であるアラメが流されることも大きな要因であると漁協組合の方が語っている。鮑等の乱獲については、ウェットスーツの導入、海士の増加等によって、魚獲量が過度になったという声も多かった。

後継者が減少しているのは、進学率が高くなったこともあって、現代の若者は定収入の少ない、また労働の激しい海女の仕事を选择不いことが主な理由であると考えられる。

それにしても、関係者は若い後継者の出現を待

ち望んでいるといえるだろうか。聞き取り調査の結果からいえば、漁獲物も減少しつつあるので、後継者が存在していないことは深刻な問題として捉えていないという。和具よりも伝統を保持する意識が強い答志漁協組合では海女の存在を保護したい意志もみられたが、今の段階では特別な対策は考えられていないようである。

1日目に鳥羽市役所で伺った話では、将来は海女の伝統を守るために、観光の範囲に海女の活動を発展させていきたいそうである。(グロリア)

謝辞

外国人の私に親切に温かく調査に協力して下さった答志及び和具漁業協同組合の皆様、海女の方々、そして答志島の皆様に深く御礼申し上げます。

文献

辻井浩太郎、小久保栄一文、「海女」入江泰吉写真、近畿日本鉄道宣伝課、1955
フォスコ・マライーニ / 牧野文子「海女の島」、未来社、1964
「海女と海上」、谷川健一編、三一書房、1990

ふくしま さとこ お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科発達社会科学専攻・地理環境学コース
どうっちい ぐろりあ 同専攻 生活政策学コース